

ふうてん

向こうの大通りには初夏の昼光が燦燦と照りつけ、人々や車の忙しない往来が陽炎のように揺らめいていと云うのに、こちら側の朽ちた塩化ビニルで覆われたアーケードの下は薄暗く、空気もひんやりとしていて淀んでいる。

平日の商店街はどこかもの悲しい。まるでその一角だけが世間から隔絶されてしまったような錯覚に陥る。

一本に続く長いアーケードを見廻してみても、そこは森閑としており、目に付くものと云えば、隠居然とした老人の彷徨、路地裏から唐突にやあと顔を突き出す野良猫、あるいは林立するしらけた商店の方々で、わずかでも割安な品々を買い求めるべく奮闘する主婦、くらしいものである。けれどもそれらの光景にしろ、決して盛況していると云ったほどではなく、疎らで、この横丁全体がもはや弱り果て、かろうじて息をしていると云った塩梅なのである。

私はそんな商店街を闊歩しながら、このどうしようもない退廃的な雰囲気にある種の安息めいた感慨を見出していた。老人に野良猫に主婦。なんと気ままでばんやりしているのだろう。日常の流れゆく時間に身を任せた人々が、ただそこに集っているだけなのである。私はそんな雰囲気にも途方もない落ち着きを感じると同時に、一日の生活の大半をここに寄生しなければな

らない連中にちよつぱり哀れみを寄せる。殺伐とした外界から拒絶されたモノトーンな人々の掃き溜めのように思う。ここにいるとどこか世間からの距離や哀愁を感じるのは、あちこちのシャツターが閉ざされ歯抜けのようになった商店街そのものと云うよりも、場末の横丁でこうして人生を濁さなければならぬ人々の儂さにあるのかもしれない。私はこの商店街の中で、私ひとりだけが唯一、何だか特別な色を持っているような気がしてきた。彼らを蔑めば蔑むほど、哀れめば哀れむほど、私の心は生き生きと弾み原色を帯びてくる。けれどもそうして彼らを見下げてみても、やはり私の心の隅に巢食うしこりは消えはしない。考えまいとしても、それは身体の内部から深海の底の泥土がガスを持ったように浮遊してくる。私はたちまち息苦しさを覚え、頭がくらくらとしてきた。ふくらみかけていた心がいちどにしゅんと萎む。同時に色も失う。ほんの少し前の、人生に対する積極的な感情の昂ぶりが、今や滑稽にさえ思われ、嘘みたいに落ち込んでしまっている。それはまるで闇の底に落ちたような気持ちである。闇は、常に私を捉え離さないのである。私はアーケードの中央を歩くのをやめ、端に避ける。呼吸が乱れ、吸ったり吐いたりを繰り返す。動悸が激しくなる。私はジーンズのポケットからラムネ菓子ほどの錠剤を取り出し、口に含む。がりがりと奥歯で噛む。んんっ、と飲み下す。そして私は、私がここを歩く目的が何もなく、ただこの横丁を海辺のクラゲのようにたゆたっているだけなのだ、と云うことに気付かされる。私は無職なのである。それも失業保険の給付がとつくに切れた、限りなく透明に近い無職なのである。

製罐工場を辞めた日がいっであつたか、それはもうとつくに忘れてしまつたけれども、工場長の鮫島だけは永久に忘れることはないだろう。紙と鉛筆さえあれば、いつでも奴の肝硬変じみた小豆色の顔を細部まで精密に描いてみせる。

私は出荷ヤードの云わば倉庫番であり、前工程の生産ラインで製罐された缶詰用の缶を、パレタイザーと呼ばれる長大な機械を使ってダンボールに箱詰めし、それをフォークリフトで積み上げるのが仕事であつた。日がな一日続く単調きわまる作業の繰り返しとにかく気力体力勝負で、冷房設備のない倉庫の中は、夏冬分かつたず身体中のあちこちから汗が吹き出した。特にクマ蟬の発情が盛んな時期は蒸し風呂で、汗の滲んだ作業着がやがて吸収性を失い、汗は所々ひび割れたコンクリートの床にまで滴つた。

そんな環境だから、取り憑かれたように仕事に埋没しようものなら、唐突に身体が茹ダコのように染まつたかと思うと、その場にぶつ倒れる作業員が珍しくなかつた。私も例外漏れず二三同様の経験を持つ。仲間の工員の手助けによつて工場に常設されている医務室へ担ぎ込まれると、老いぼれ医師は私の胸元になおざりに聴診器を当て、大抵熱中症か脱水症状の診断を下す。そして定期的な水分補給を、と注意を促すだけで後は何の処置もない。労災もなければ、病気を理由に仕事を休むこともままならない。そのたびに私はこんな劣悪労働に耐えかねて仕

事を辞めてやろうかと思っただけでも、辞めたところで他に伝手はあるまいし、齒を食いしばって頑張る外ないではないか。

平成二十三年三月二十一日が過ぎ去った後は、発汗は益々多くなつた。最大震度七を記録した東北の大地震により、各被災地に物資の配給として大量の缶詰めがばら撒かれると同時に、連日マスメディアが人々の不安をかきたてるように垂れ流した今後想定されうる首都直下地震、それに伴う食糧難の風評に踊らされた人々がこぞって缶詰めを買い求めたからである。無論缶詰めは、物資や保存食の類で最も保存性に優れているから、日を追うごとにあちこちの食料品メーカーから尻を叩くような依頼が殺到した。私が勤める工場は同業種に比べ、とりわけ多くの設備を持っているわけではなかったけれど、東北の至る所の工場は倒壊し、原発停止の影響で電力の供給もままならないから、新規の顧客が関西圏のこちらにまで舞い込んで来、皮肉にもその恩恵を得る形となっていたのである。

機械は朝も夜もフル稼働で、作業員はその流れに何とかしがみつ়く格好であつた。まるで主導権は機械の側であり、人間がそれに足並み揃えて媚びていた。私は目眩にも似た症状を覚えながら日に数千の梱包を仕分けた。無論、他の作業員もひたむきに働いたが、劣悪労働きわまる環境に嫌気がさしたのか、日を重ねるごとに一人また一人と去って行く。それも前途有望な若者たちから順に……。残るのは、私のような不惑の中年工員か、はたまたわずかながらの定年退職金が諦めきれぬ老工員ばかりである。

けれども、それでも工場は動きをゆるめる気配はなかった。先行き見えぬ大恐慌時代特有の、代わりの人材ならいくらでもいる、という経営者側の怠慢がそうさせていたのである。現に新たな代役は続々と投げ込まれた。もはや同じヤード内で仕事をしていても、個々の作業員の名を悠長に覚えていた間もないほど入れ代わりが激しかった。忙しかった。

私の疲労は極限に達し、身体の節々がむち打ち症のようになった頃である。それまで三交代だった勤務体制はやがて二交代へと変わり、作業員一人当たりの労働時間が十二時間超となっていた月末。その日はようやくやく待ちわびた給料日であった。私たち作業員は終業の時刻になると、トタン板で囲われた小さな経理室の事務所に整列させられた。

経理の手によって一人ひとりに給料明細書が配られて行く間、皆嬉々とした表情を浮かべている。頭の空で金の使い道を詮索しているのである。或る者は家族を養い、或る者は女を買う、また或る者は博打で負け越した借金の返済に充てがう。その成果の報酬は労働者の結晶であり、血肉である。私は明細書を手渡されると九十度一礼し、にこやかに微笑して見せた。ただそれを受け取るためだけに一ヶ月間耐え忍んできたのだ。汗水垂らし我武者羅に働いてきたのだ。そういった感慨が表情となつていちどに溢れてきたのであった。

けれども明細書を開いた私の顔色は、たちまち濃紺色となつた。

そこに記載された額面には、残業手当ての一切がなかったのである。私は関節という関節が抜けたようになって、がちがちと震え出した。おもむろに周囲を見廻すと、他の皆もち

やがちゃしていた。私はすぐに経理の一人の眼前に駆け寄ると、問い詰めた。

「いったいこれはどういうことだ。私は朝八時から夜八時まで、あるいは夜八時から朝八時まで、一日十二時間ほとんど強制的に働かされている。つまるところ、最低でも日に三時間の残業代が約束されているはずであり、それが月二十日とするならば六十時間、それがまるきり零などという事態はどういういきさつか」

「それは私におっしゃられても困ります」経理はかぶりを振って応えた。「私だってあなたたちと同じ心境、同じ境遇なのでございます。詳しい経緯のほどはわかりかねますが、残業代のカットは鮫島工場長自らの意向だそうですし、月産ノルマを達していないにも関わらず、社員に残業代を支給する義務はないとおっしゃられているようなのです」

私は深い深い溜息を吐いた。他の皆も深い深いしていた。なんと云う無茶苦茶であろう。そもそも機械をフル稼働させていても生産は間に合わずてんやわんやの状態なのだから、数が取れなくて当然である。だからと云って売上げは低迷しているどころか、震災以降益々上り調子のはずである。それなのに社員の手当が無一文とはどういうつもりだろうか。まるで鮫島は鬼畜である。鬼畜米兵である。

先月入社したばかりの見習いの若い作業員が、明細書をビリビリ裂きながら、吠えた。

「こんなパンクした馬の糞みたいな会社、こっちから辞めてやらあ」

「まあ、待てよ」私は慌てて彼を取り成そうと努めた。「私に良い提案がある。みんなで労働

基準局へ訴え出よう。流石にこれはあんまりじゃないか」

私は周囲の意見を伺った。けれども皆俯き加減で何も云わず、その場でぼんやりしているばかりである。唯一、勤続二十五年のプレス担当の老工員だけがぼそぼそと呟き出した。

「労基なんてもんは酒の肴にもなりやしねえじゃねえか。あんなもんどいつもこいつも天下りの端くれで、日も傾いてないうちからびゅうつと我が家へ帰ってジャイアンツでも応援してらあ。実際、あの連中がわしらに何をしてくれたってんだ？ 奴らは監査監査と抜かしておきながら、まるでビール工場の見学に来た幼稚園児の如く遠足気分じゃねえか。その証拠に奴らはわしらが不当に働かされている時間帯に一度でもその監査とかいう遠足に現れたことがあるかってたんだよ」

「まったくその通りですよ」若い作業員は頷いた。「裏ではどっぷり企業と癒着してやがるんですよ、あいつら。なぜならばそもそも世の中に企業や資本家がなくなれば、労期なんてもんの存在意義は端からありませんからね。企業を糾弾し過ぎれば、自ずと自分たちの飯の種がなくなる、持ちつ持たれつなあなあの間柄が一番なんですよ。結局彼らも公務という皮を被った一労働者に過ぎないんです。そしてその本質にはたと気が付かないぼくたち民間の雇われ階級は、頼みの綱は労期だ、などとのたまって彼らに万歳三唱送って馬鹿を見ます。ぼくは世の中のこんな汚いやり口にもう辛抱がたまらない。今すぐ辞めさせて頂きます」

「よう云った、若者！」労工員は拍手喝采を打った。

若い作業員は床にベツと唾を吐くと、踵を返し、殴るようにドアを開け、その後も道々に唾を吐き吐き去つて行つた。私は頭を抱えうな垂れるばかりで、もはや返答のしようもなかった。心の中で、また仕事が増えるなあ、とぼんやり思つた。

そんなこんなでは埒が明かぬ。そう思つた私は、一人鮫島の元へと直談判に向かうことにした。何も他の工員の意見を代弁して、などという義勇に駆られたわけではなく、私自身が肉体的にも精神的にもはや困憊に達していたからである。他の工員の如く泣き寝入りだけは御免被ると考えたからである。

社長室の重厚な木製扉を怒りに任せノックし、向こうから返事のないままに開けてやつた。鮫島はただっ広い室内の最果てで、重厚な牛皮の椅子にゆつたり鎮座し、重厚な黒漆の机に肘を突きながら重厚な新聞紙を繰っていた。そのすぐ側には、最近長年秘書を兼任していた妻を捨て、新たに雇いなおした重厚でうら若いフィリピーナが佇立している。彼女は手に、いかにも重厚な盆を持っており、その上には重厚なソーダ水が限りなく透明に近いブルーに光っていた。

「全体これはどういうことですか」

私は賃金の件もあつたけれども、社長室の実にバブリーな様相も皮肉る調子で云つた。

「何？」

鮫島はこちらに視線を向けることなく、まるで他人事のように依然紙面を見つめたまま云つ

た。

「何じやありませんよ」私は語気を強めて云った。そして机に、いよいよ明細書を叩き付けた。「いくらなんでも残業代のカットはないでしょうに。これじやあまるで道理に反している」

「君の言っていることはさっぱりわからんよ」鮫島はようやく顔を上げると、私の雀の涙ほどの数字を無関心そうにちらと見、すぐにそれを私の元へと突き返してきた。「残業代ってあんた、今月はノルマが全然なんだから支給のないことは当然でしょう」

私はあらかさまに大きな溜息を吐いてみせた。

「ちよつと待つてください。そこがまずおかしいのですよ。今の人材と設備では到底生産が追いつかないことは明白でしょうに。それだから社員が一丸となって残業をやっているわけです。私はこの会社に勤めさせて頂きもうじき十五年になりますけど、労働条件は日増しに悪くなっていますよ。さらに問い詰めるならば、今回の件はあまりにヤクザではありませんか。私の不満は湯水の如く溢れているのですよ」

鮫島は口元に両手を当て、黙り込んでしまった。しばらくの間、増築を繰り返し繰り返し肥大した社長室の中が森閑とした。ただフイリピーナの、胸元のざっくり開いたほとんど下着と云って良いドレスから今にもこぼれ落ちそうな乳房だけが、ふるんふるんと縦横無尽に動揺していた。

少し経て、鮫島は自分の顎鬚を確かめるように摩りながら、ようやく口を開いた。

「今の時代、そう言つてはおれんでしょうが。震災もあつて世間のムードは暗く沈んでいるというのに。そんなときにうちの社の缶が注目され、少しでも復興の兆しに貢献することが出来た、実際貢献することができた、それだけで儲けもんだと思いませんか？」

「いったい何が云いたいのですか」

「いや、だから世の中つてのは助け合いで成り立っているのですよ、助け合い」

「助け合い？」

「そうですよ、すべては助け合いです。それから絆ですよ、絆」そう云つて鮫島は、どこか誇らしげにぽんぽんと手元の新聞紙を叩き指差す。「まだ見てないの？」

自然そちらに目が行くと、紙面の見出しには小さいながらもこのように書かれてあつた。

『東日本大震災復興に二億円寄付！ 下町の人情社長が語る経営力』

その欄の右端には、鮫島が自社の缶を手に取り、全体朝礼では見たこのないあかぬけた表情でポーキングをキメている。

私は信じられない気持ちでその場に棒立ちとなつた。開いた口がふさがらないとはまさにこのことである。鮫島は私たち社員に支払うべき残業代はカットするのに、その裏ではこうして震災の寄付金に尽力を注いでいたのである。いや、その云い方はちつとも的を射ていない。こ

の寄付金の出処は、元々私たち社員が労苦して働いたそれだと云って過言ではない。つまり鮫島は、自社に利害を被ることなく効率的に寄付金をかき集めるべく、私たちに對してはノルマの不出来の口実を設け、鞭をふるい、サービス残業を促し、そこで浮いた錢から幾許かを寄付金に充てていた寸法である。私は紛れもない搾取のそれを一瞬のうちに悟ってしまった。無論、この夕刊の三面記事のゴシック体にはこのような事實は一切記されていないし、その内実を知らぬ世間からすれば、この「下町の人情社長」とやらはなんと純然たる善意の心を持った人物だと映ずるはずである。そして鮫島自身もまた、それに対し何ら後ろめたいものを感じていないどころか、我が行いに陶醉さえ覚えていようなのである。私はたちまち背筋が寒くなり目眩を覚えた。鮫島の善意という名の自慰行為の傍らで、彼を頂点とするカースト制度の末端の私たち労働者は、悶え苦しむほかないのである。唯一の救いは、その錢が直接鮫島の性欲処理の道具とはならず、こうして少しでも東北の力になれたことくらいであろうか。いや、それもまた正確ではないだろう。経営者の頭の中の真実の思惑は、当然震災の復興など微塵もないことは、明らかなのであるから。

「今度ほら、あのテレビ。あの企業のやつに出ることになってるんだよ。ほら、あれなんだっけな」

鮫島はどことなくだけた調子で云うと、秘書の方を振り向いた。工場長の援助で祖国にプール付きの邸宅を購入したと噂されるフィリピーナは、ひとこと。

「カンブリアパレスデス」

「あ、そうそう、カンブリア。リユー村上だよ。限りなくなんとかの人。作家。あれと対談するの、うちんどこ。テレビ出るの。すごいだろっ」鮫島は突然立ち上がると、私にくっつくの、ない微笑を投げかけ、同時に手を差し伸べてきた。「来年は二億などと言わず、倍の四億を目標に掲げ復興支援に充ててゆきたいよね。そうすればうちの社ももっともって知名度が上がって成長するし、今以上に大きく紙面にも取り上げられる。これが本当のグローバニズムってやつですよ。いや、それよりバングラディッシュに小学校を建設するのはどうだろう？ あそこもかわいそうな国だね。そうそう、私は元来親父のこの会社を引き継ぐまでは、教師になるのが夢だったんだよ」

仕事を辞したのは、それから一週間もしなうちであった。こうして私は、世間の規律ある時間の流動におさらばし、例によって虚無を引きつれ商店街にいる。幸い私は天涯孤独の身であるから、これからもうしばらくはわずかの貯蓄を食い潰し食い潰し生きていけるけれども、それでもお天道様の下を大手を振って歩くのには気が引ける。このところその感慨は益々濃くなってきたおり、精神が黒い闇を持ったようになってしまつて明るさを知らない。ときに太陽が射したかと思つてもやっぱり闇の雲が背後に控えている。そんな日の私は篠突く雨で、いつそ

やけのやんぱち首でも括って死んでやろうと思うけれども、それもなんだか面白くない。

小さなプラモデル屋の前で立ち止まる。ショーウィンドウに飾られた何百分の一に縮尺された戦艦大和を眺める。完成までに苦心しただろう造形美よりも、甲板に灰の如く積もった埃が目に行く。これはこれでなかなかリアリティかもしれない。店先から見える店内にぐるり視線を這わせてみても、物珍しそうな物は何も無い。店主は私と同年代か、もう少し若い。カウンターの斜め上の小さなブラウンカンテレビに首をねじ曲げ、見にくそうに観賞している。この体制をあと数年維持していれば、確実に首の骨が変形し、持病となるだろう。いや、もしくはもう慢性となっていて、国から幾許かの生活保護費を受給している身かもしれない。そうに違いない。そうでないとこんな所でテレビにかまけている暇はない。そう思うと私はそれが途端に羨ましくなり、そういつた保護費の待遇を得るにはどうすれば良いのか気になってくる。労働者であった頃から疑問には思っていたのだけれど、巷の噂によると、場合によっては給料なんかよりも保護費の支給額の方が断然上というではあるまいか。私はかつてそんな情けないことがまかり通る世の中のからくりに、酷く失望したことがあるけれども、失望しきった今となってはその保護費とやらが妙に尊く感じさえるのである。

私はふと、ここ最近酷くなり行くばかりの神経衰弱を理由に、役場に駆け込んでみようかしらん、と考えた。簡単な審査と書類の手続きさえ済めば、あとは何の気兼ねもなく人生を謳歌できるといふ。月に数度は美味しいものを食べ、パチンコもやれるという。保護費の身であるか

らとてたいした柵はなく、精々持ち家や車を所有できないことくらいであろうか。けれども私にはそんな資産は端から与えられていないのだから、別段気にすることもない。いや、医療や保険の面を考えると、特典だらけでさえある。嗚呼、今すぐにでも生活保護を受けたい。受けながらえたい。私はそう思い天を仰いだ。同時に腹がぐうと鳴った。私はそこを退き、再び歩き出した。

切花しか置いていない花屋や、豆腐を売っていない豆腐屋が過ぎて行く。腹が減ったのだから何か食おうと辺りをきよろきよろ伺うと、果物屋の店先の西瓜に目が止まった。プラスチックの通い箱の上にでんと一玉だけ置かれた西瓜は、見慣れぬ模様をしている。一般的に、緑の球体に黒の縞々が浮かんだそれが西瓜だと思っていた私は、ちよつとびっくりした。眼前のそれは全体が濃厚な緑で、あの縞々がない。その西瓜の下に立て掛けられた木札には達筆な墨字で「でんすけすいか」と記されてある。私はそれを不思議に思っしげしげ眺めていると、店の奥から店主が「らっしやい」とやって来た。

「お客さん、それはでんすけすけって云ってね、北海道は当麻町でしか採れない代物ですわ。それも今年初物やさかい美味しいこと間違いなしでっせ」

そう云って店主は、パンツと一回、無意味に手を打ってみせた。

「へえ、おいくらですか？」私は少し興味を持って尋ねた。

「はいはいはい、こんな感じでございやす」店主はでんすけすけの木札を裏返した。そこに

はこれまた達筆に一万円と書かれてある。

私はかなりたじろいで云った。

「買えやしませんよ」

「四等分にして小分けにもでけるよ」店主はいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「結構」私はかぶりを振った。「それよりその隣のやつを下さいよ」

そう云って私はそちらに目配せした。そこにはでんすけすけすけの半分ほどの大きさの、少し小ぶりの普通の西瓜がずらり並んでいる。一玉九百八十円である。

「へい、ありがとうございます。こつちもでんすけに負けず劣らず美味しいよ。熊本育ちのぴちぴち女子大生といった感じですよ。何玉にしよう？」

「それを四等分で」

店主は表情筋の皺をいきなり無にすると、あきらかな舌打ちを一つ垂れ、奥に引き返し、大きな包丁持って来た。一瞬、私は店主が持ったそれでぶすり腹をいかれるのではないかとうろたえたけれども、それは西瓜包丁で店主は無言で西瓜を切り分ける。そして私に目を合わせることなく、「二百五十円」とぶつきらぼうな調子で云うと、礼もなくさっさと奥へ潜ってしまった。私は口をへの字に曲げかまうことなく齧り付いた。ひんやりとした甘い汁が口中に広がり、実の繊維を舌先で磨り潰すと、さらにどっと汁が溢れた。厚い皮の表面にはまだ肥やしの匂いが少し残っている。美味である。

「あの、すみません。そのでんすけすいかというのは、おいくらですか？」

そのとき、私の背後でそう訊ねる声があった。鈴を転がすような声である。

「はいはいはい」店主が喜色満面やってきた。「こちらはこうなったりやす」裏返される。

「あら、とてもお高いんですね」

女は案の定、驚いた様子で云った。

「四等分にして小分けでお売りすることもできやすよ」店主は私の時同様、いたずらっぽい笑みを浮かべて応えた。どうやらこの西瓜は最初から客寄せの見世物に過ぎず、売れぬものと踏んでいるらしい。店主は木札を裏返したときの客の反応を楽しんでいるのである。

けれども女はしばらく思案した後、問うた。

「では、二等分にして頂けますか？」

「えっ」今度は店主が驚いた様子である。「はいはいはい、でけまつせ。にしてもお姉さん、ほんまに買われまんのか？」

「ええ、ほんとよ。いただくわ」

店主はにこやかに微笑むと、額のにじり鉢巻締めなおし、西瓜包丁構えた。

「お姉さんえらいべっぴんさんやから負かさせてもらうわ。四千円でええよ」

店主は半分に切ったそれを袋に入れ、女に差し出した。

「嬉しい。ありがとう」

女は私の隣まで歩み寄り受け取ると、手首に提げた麻の買い物籠から財布を抜き出した。その拍子に、女の方から香水のほのかな甘さがあり、私は思わず見やった。女は非常に美しかった。

「まいどあり」

店主は去りゆく後ろ姿に、何度も何度もお辞儀していた。

気が付くと私は、彼女の後ろを歩いていた。

私はほとんど無意識のうちに、本能の赴くままに後をつけた。無論、近からず遠からず、絶妙な距離感を保ちながら、そして彼女が唐突に振り返るのを恐れ、何気なく通りをうろろしている仕草を忘れずに。私は彼女を見失わないように視線を捉えたまま西瓜を頬張る。味覚はもう失せており、もはやそれを楽しむ余裕はない。ただ一秒でも早く胃の中に収めてしまいたい衝動だけで口を動かしていた。

薄黄色の向日葵の柄が散りばめられた白いワンピースを着た若い女であった。身だしなみのセンスから云うと、ちょっと流行遅れだと思っただけけれども、その流行に対する反応が返って彼女を清楚に見せていた。何よりそのワンピースの白よりも純白な肌を持ち、それが決して厚化

粧によるものでも不健康な感じでもないところが素晴らしい。左右の顔の均衡も、華奢な体のうちに秘めた隆起も、総てにおいて申し分ない。

女はアーケードを歩きながら、ときどき商店の中へと入店する。私も後に続いたり、店先の前で待ち惚けたりした。どうやら女は夕飯の素材を揃えているらしく、他の買い物客同様、安い物から順に選りすぐっている。どうやらその手付きを見れば、さっきのでんすけすいかはよっぽど奮発したものと思え、今晚のメインディッシュとなるのかもしれない。

私はこんな場末の商店街に、こんな美麗な女が存在するという事実には驚愕すると同時に、すっかり彼女の虜となってしまった。それは何も恋愛の類ではないし、コケティッシュに対する唐突な性衝動でもない。確かに彼女は美しく魅力的だけれども、そこに一抹の、どう表現したら良いのかわからぬ懐かしさがある。私はその懐かしさの根源を知りたくて、女をつけた。

女は買い物籠を膨らませると、満足したように商店街を後にし、一度大通りへ出た。日が暮れ始めた空の虹彩に、私の臉はじんじんと痛んだ。

スーツ姿のサラリーマンやOLが絶え間なく交錯していた。歩道の街路樹からは蝉がワシヤワシヤと甲高く鳴り始めている。来週にもなると、その音は二倍にも三倍にも膨れそうな気配である。学生通りに掛かると、倶楽部帰りの坊主頭たちが何か食いながら談笑している。ぶつぶつ小さくぼやいていたと思つたら、突然わつと鼓膜を劈く声で爆笑している。私は周囲の喧騒に意識が朦朧とし、急な嘔吐感に苛まれた。精神科医から処方されている薬がちつとも効い

ていないように思われた。

それでも私は女の背中を見失わずにいた。なぜだかわからないけれども、もし見失ってしまったならば、私のこの神経衰弱は到頭歯止めが利かなくなつて、私自身の存在がすっかり闇に呑まれてしまうのではないか、という恐さに襲われた。

私はこの病の発端を、確証はないけれど、あの製罐工場での労働の中にあるような気がしていた。そして仕事を辞めた今となつても、私の内部のしこりは癌細胞のように、身体中のあちこちにゆつくりと転移を広げている。それはもはや末期で、私は一人であるのがたまらなく不安で、孤独で、その両方に潰されそうになつたとき、頭の中が混乱する。

女は駅のロータリーの前を歩調を弛めず進むと、さらに歩き、またひと気のない所へ行つた。そこはベッドタウンから逸れた町工場の犇く通りである。辺りのあちこちから鉄やゴムの焼ける匂いがした。黒く霞んだトタン板の工場から、金属をカンカンと打ち付ける音、何かをプレスする衝撃、飛沫する油、煤煙、噴き上げる水蒸気。女はずんずん前へ行く。私は追う。するとそうこうしているうちに、狭い溝川に架かる橋へ出た。

その橋は、ちやうど隣町に通じる境となつていただけでも、私はかつてその先に赴いたことはなかった。何でもその地域は昔、この国の戦争によつてやつてきた半島系の人々が一同にそこへ追いやられ、今現在に至つてもその名残りが社会的に問題となつてゐる場所であつた。私は戦争も知らないし、右も左もわからないけれども、昔から隣町の評判はあまり良いように

聞かないから、なんとはなしに容易に立ち入ることが憚られた。

女はためらうことなく橋を渡った。濁って腐臭を放つ水面には、鮮やかな紅色の夕陽が映っている。私はどうしようかと悩んだけれども、ここで見失っては困ると思ったから続くことにした。

渡りきった所で、景観はさつきとさほど変わらなかった。人々の様子も変わらない。私は噂に人攫いが出るとか、排水溝に山ほどの鶏の首だけが落ち、血の海となって流れているとか、そう云った奇妙奇天烈を聞いていたからちよつと呆気にとられた。何故ここがそれほどまでに問題となっているのかも判然としなかった。あるのはやはり小さな町工場で、しばらくはそればかりである。強いて云うなら辺りの下町的な風情が、より一層強くなったことくらいであるか。

道は徐々に狭くなってきた。その頃になると、工場の合間合間に平屋の家が見え、やがてそれが軒を連ねるようになってきた。平坦な道なりのずうつと向こうにまで家が伺える。喧騒はとつくになく、人の気配もあまりない。遠くの方でさおだけ屋の宣伝放送が微かに聞こえる。この町にはまだ、私が幼い頃におぼろげに見た昭和が残っており、私は段々と心が落ち着いてくるように思われた。同時に、世間から忘れ去られたあの平日の商店街の、独特な云いようない侘しさが、そこにも存在していた。

老人が犬ころを散歩させているのに目が留まった。立派な毛並みを持った柴が向こうの電波

塔にかかった黄昏目指して歩いている。少しぎこちない足取りだったので気になって見ると、後ろの両足はなく、飼い主が拵えたものだろうか、両側に車輪の付いた補助具を腹に敷き、手押し車の体制で器用に前足だけを動かしている。車輪は回転するたびにきゅるきゅる音を立て、軋んでいる。

さらに道は細くなった。ときどき行き当たる十字路には一方通行の標識が目立ち、次第それも見当たらなくなると、到頭車幅がなくなつた。側に一定の間隔で植わる外灯が一斉にパチパチ明滅し、灯つた。するとどこからともなく大勢の羽虫が現れ、やわらかい光に群がり始めた。私はもう引き返すつもりはさらさらなかつたし、実際一度も振り返りさえしなかつた。振り返つたところで帰り道などわからない路地に迷い込んでしまつたのだから、意味をなさない。いや、もはや私には、私の帰る場所など到底ないように思われた。私の後ろには途方もない闇が広がっており、踵を返せばその闇に吞まれてしまうのではないかと恐ろしくなつた。闇は私の歩く側から侵蝕を始め、黒く蠢いて、濃霧のように私を包んでしまうのではないか。闇に覆われた私は、そのまま黒と同化して、実体が雲散霧消してしまうのではないか。私はまたもや呼吸が乱れて来、焦るように歩調を速めた。女との距離が次第縮まる。幸い女は、ずっと前方を捉えたままこちらに首を廻す気配はない。

気まぐれな風が一陣、さつと吹き、女の肩までの黒髪を撫でつけた。うなじに密生する髪と肌の境に大きなほくろが一つあり、私は今まで考えもしなかつただけけれども、彼女は人妻と

あるような気がしてきた。だからと云つてどうと云うこともないのだけれども、私はちよつとそれが信じられない気持ちであつた。

丁字路を左に折れると、そこにはもう道はなく、二階屋の小さなアパートメントとなつてゐた。女はモルタルの門柱を潜ると、赤錆びた螺旋階段を上がり、一列に五つ部屋のあるうちの、手前から二つ目へと消えて行つた。その拍子に部屋のすり硝子がぼつと明るくなつた。私は一部始終を門柱の前から見上げるようにして眺めていたけれども、しばらく経つて、私も門を通過し、螺旋階段にそつと足をかけた。

紅い陽に染まる鉄骨の廊下を渡り、女のいる部屋の前で佇立した。古い木造の扉はいかにも立て付けが悪そうで、築三四十年は容易に経過しているものと思われた。

中から水道の流れる音が聞こえてきた。側に剥き出しとなつたTOTOPレアの四角いガス機器にガスの臭いが立つ。同時に頭上の換気扇がぶんつと唸つて非常な速度で回転する。その潤滑油のきれかかった換気扇から、埃っぽい室内の匂いと、そして肉や野菜が焦げる匂い、それからあの、でんすけすいかの匂いが漂つて来、私の鼻を突いた。その途端に、夕陽が陰り、辺り一面闇となつた。私の瞳孔は開き、喉が締め付けられた。私は咄嗟に扉を叩いた。ドンドンと、まるで蹴破るような力強さで持つて、無我夢中に叩いていた。ドアノブを捻つて見ても開かないから、私は仕方なく叩き続けた。もはや目眩を覚えている間もなかつた。

到頭闇に総てを委ねてしまひそうになつたとき、扉の向こうで板床が忙しく軋つた。そし

てカチャリと錠の外れる音がしたと思うと、ぼんやりした光に相俟って女の姿が現れた。

私と女は対面する形式となった。私は何も云えなくて、額に脂汗を噴き出しながら、ただぜえぜえ喘いでいるばかりであった。

女は私の顔をまじまじと見、それから不思議そうに首を傾げると、やがてにっこり微笑んでこう云った。

「あら、おかえりなさい」